

## \* 帝国陸軍の戦闘機が引っかけた 60m 鉄塔検証

### —その2、別の鉄塔からの眺め、陸軍側からの情報—

アーカイブ室新聞 172号に「帝国陸軍の戦闘機が引っかけた 60m 鉄塔検証—その1、写真発見—」を書いた。今回はその2段である。古い東京天文台の写真を眺めていたら東京天文台構内図の別の 60m 鉄塔の位置の高い所から撮影したと思われる 26 吋赤道儀望遠鏡ドーム(⑨)、太陽分光写真儀室(⑧)、ブラッシャー天体写真儀室(⑦)、塔望遠鏡ドーム(⑥)、ゴーチェ子午環南子午線標(⑩)が写った写真1があった。

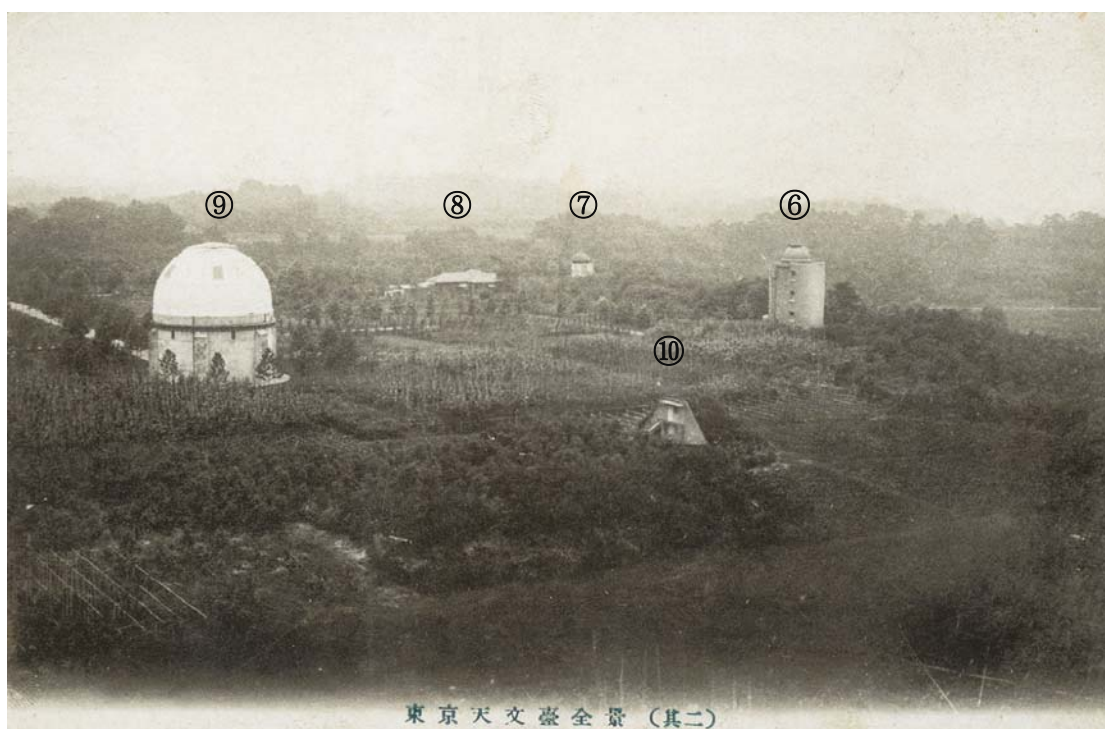


写真1 東京天文台構内を南東に見た写真

この写真は、航空写真ほど高い所から撮影したとは思えないが、かなり高い位置から撮影したと思われる。この写真に写っている 26 吋赤道儀望遠鏡ドームにも窓があるドームが写っている。東京天文台の昭和8年(1933年)の建物配置図のこの番号を付けた建物5箇所からある場所に視準線を引いてみたのが図1である。見事に 60m鉄塔の1基に符合するのではないか。これは紛れもなくこの場所にあった 60m鉄塔に登って撮影したことを証明している。そしてこの昭和8年の建物配置図に描かれた位置に 60m鉄塔があった証拠になるのではないかと思われる。60m鉄塔は4本あったとあるが、それらのどの鉄塔に陸軍の軍用機が触れて墜落したのか、まだ分からないが、インターネット上に「陸軍飛行第244戦隊—調布の空の勇士たち—」(<http://www5b.biglobe.ne.jp/~s244f/>)がある。その中

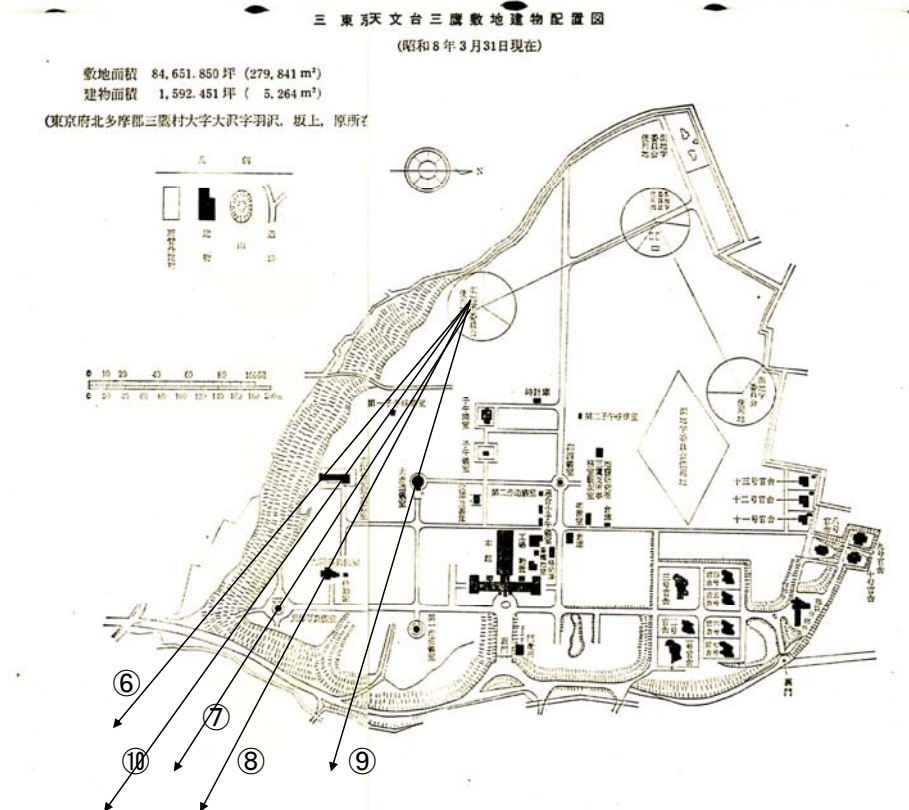


図1 南西の60m鉄塔から写真1に写っている建物への視準線を引いた図

にこの60m鉄塔に触れられており、その著者に引用、転載をお願いしたところ、次のようなメールをいただいた。当時の陸軍関係者としての認識と東京天文台側との認識に多少の差はあるが、当時の事情を知る貴重な資料と思われる。

以下引用文：ご依頼の件ですが（引用、転載の許可願ひ）、ご自由にお使い下さい。この鉄塔につきましては、平成7年に上梓した拙著『陸軍飛行第244戦隊史』にも記述がありますので、引用します。これも転載して下さいません。

なお、報時業務は軍にとっても作戦遂行上必要ですので、鉄塔の撤去は、引用文にもありますように、本墜落事故とは無縁と考えられます（筆者注：東京天文台90年史には、この墜落事件が直接の鉄塔撤去の原因と書かれている）。天文台の鉄塔と浜田中尉…『陸軍飛行第244戦隊史』より

昭和十八年八月二十一日、第一航空軍司令官李王垠中将を迎えての夜間防空演習が行われた。

警報の発令により、〇一〇〇頃、濃霧の中を浜田道生中尉（航士五十五期）を編隊長とする九七戦四機編隊がまず離陸した。浜田編隊は滑走路を南に向け離陸し、間もなく雲中にその姿を消した。当時、第三中隊は、未だ三式戦と九七戦を併用していたのである。

その直後、一機が飛行場東側の東京天文台付近に火達磨となって墜落炎上したのが望見され、直ちに演習は中止となった。戦闘指揮所では在空の各機と無線連絡をとったが、浜

田中尉とは連絡がとれず、墜落したのは浜田機と思われた。

残る三機はバラバラとなって上昇を続け、雲上に出た。うち二機は、基地の方探による地点標定によって調布に帰還することができた。最後の一機の操縦者は、燃料も尽きた機体を捨て、決死の思いで雲上から落下傘降下して辛うじて生還したが、もうその頃には夜が明け始めていた。

浜田中尉機は離陸上昇中に左旋回し、低空飛行の末、滑走路のほぼ真横七百メートルの位置に立っていた東京天文台の空中線鉄塔に衝突して墜落したものであった。視界ゼロの雲中で何故、危険な旋回をしたものか分からないが、何らかのトラブル、あるいはアクシデントの結果であろう。

以前からこの鉄塔は危険であるとして、衝突防止灯火を設置するよう操縦者たちから繰り返し要望が出されてはいたのだが、未だ設置されていなかったのである。しかし、この事故後、ようやく灯火が設置された。この後、浜田中尉が命と引き換えに残したこの灯火に救われた操縦者は少なくなかったのである。

ここで、この鉄塔について触れておこう。

東京天文台構内の北方には、報時業務用の空中線鉄塔が四本、上空から見て菱形に配置されており、それぞれの高さは約六十メートルもあった。

天文台は飛行場の位置する立川段丘面より二十メートルほど高い武蔵野段丘面にあるので、滑走路面を基準とすれば、鉄塔の高さは八十メートルにも達していたわけである。

南風の場合でも、離着陸の際の場周経路（左旋回で深大寺付近を通る）とは離れており、通常は障害にならなかったが、本件のような夜間、それも悪天候下では、大変危険であった。

実は、このいわく付きの鉄塔も、二十年四月、陸軍によって切り倒されている。これは、低空を飛ぶ小型機の来襲が増えるにしたがって、天文台東側の高射砲陣地（現羽沢小学校崖上）から水平方向への射撃が増え、鉄塔が邪魔になったからだと言われる。

戦争末期、天文台の構内は爆弾の穴だらけだったという。これは、おそらく二十年二月十六、十七両日、調布飛行場、倉敷飛行機調布工場（現 J A X A 飛行場分室）、中島飛行機三鷹研究所（現国際基督教大学）に対する敵艦載機による空襲のとぼっちりを受けた結果であろう。施設に直接の被害はなかったが、爆撃の振動によって精密観測機械は全て使用不能に陥っており、天文台も用を成していなかった。報時業務も停止されていたと思われ、鉄塔も既に無用の長物と化していたのではなかろうか。 櫻井 隆

貴重な文章を提供くださった、櫻井 隆氏に厚くお礼を申し上げます。